

所属大学への愛着と“学生FD”の関係

吾郷美奈恵・藤田小矢香・長島 玲子・佐藤 壮・
松田 善臣・木村 秀史

概 要

島根県立大学の学生が所属大学への愛着や、関与を希望する大学教育活動とその背景を明らかにすることを目的に、全学生を対象に無記名自記式の調査を行い、972名(回答率81.6%)から自主提出があった。

大学に対する愛着度得点は、学部や志望度による差はなく、学年が上がるほど高かったが有意差はなかった。“学生FD”として紹介されている11の活動すべてにおいて、希望している者がそうでない者より愛着度得点は高く、そのうち学生が主体的に取り組む8の活動で有意差を認めた。また、“学生FD”を認知している群がそうでない群より愛着度得点が有意に高かった。一方、授業、サークルや部活動、大学行事やイベントに力をいれていない者は“学生FD”の活動を希望していなかった。

キーワード：集団同一視尺度、愛着、学生FD、大学

I. はじめに

日本の大学(学部)進学率は2017年度52.6%(男性55.9%,女性49.1%)で過去最高となった(文部科学省,2017)。高等教育は該当年齢人口の在学率が15%までのエリート段階,15~50%のマス段階,50%以上のユニバーサル段階というように推移し(マーチン・トロウ,1976),日本は2005年に誰もが高等教育機関への進学機会が保証されるユニバーサル段階に入った。1991年の大学設置基準大綱化に始まるとされる日本の大学教育改革は(山上,2013),1990年代から2004年にかけて大学進学率が30%台半ばから40%台後半へと上昇したユニバーサル移行期からユニバーサル段階への転換期と呼応するように進められてきた。その一つ

が、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への視点の転換や正課外教育の積極的な捉え直しである(文部科学省,2000)。また、大学教員のファカルティディベロップメント(Faculty Development,以下FDとする。)は、大学設置基準において1999年に努力義務を規定し、2007年には義務化された(文部科学省,2007)。さらに、2017年には職員のスタッフ・ディベロップメント(Staff Development,以下SDとする。)の機会を設けることが求められた(文部科学省,2016)。

日本においては、大学の組織的な教育改善の取り組みであるFDのうち、学生自身が求める教育改善の課題に学生が主体となって取り組む活動を“学生FD”と名付け、全国の大学に普及している(木野,2016)。この“学生FD”は、欧米の大学で主流となっている「学生関与(student involvement)」や「学生従事(student engagement)」といった大学活動や大学組織への参画と異なり、日本独自の活動である(木野,2012・木野,2015)。島根県立大学総合政策学部

この研究は、島根県立大学出雲キャンパスにおける平成27・28年度特別研究費の助成(代表：吾郷美奈恵)を受けて実施したものである。

と看護学部の学生・教職員 10 数名が“学生 FD サミット 2014 年夏”に参加し(京都産業大学, 2014), 看護学部ではその年から“学生 FD”の取組を始めた。その活動の一つとして“しゃべり場”を開催し, 「良い大学とは」をテーマに話し合った結果, 「自由で誇りをもてる大学」「『島根県立大学です』と自信をもっていえる」ことであった(吾郷, 2015)。これらのことから, 学生 FD と愛校心は密接に関係していると考えられる。

一般に, 社会心理学では, 組織への愛着(group attachment)や組織との自己同一化(organization identification)など組織への帰属意識が, 組織へのコミットメントに影響するとの知見がある(小玉, 2010)。大学生については, 所属大学における集団への愛着(group attachment)や, 個人的なつながりを持つ所属大学関係者への愛着(member attachment)が, 学生による所属大学への貢献, 学業成績, 在籍期間などに影響を与えるとの指摘がある(France, 2010)。一方, 集団同一視を集団に対する同一視(IDgroup)と成員に対する同一視(IDmember)という2つの下位尺度をもつ集団同一視尺度は, 下位尺度内の内的一貫性は示されている(唐沢, 1991)。学生は所属する大学の集団構成員として自らを同一視できることから, 集団同一視尺度を用いることで愛着が測定できると考えられる。この尺度を用いて“学生 FD”と大学への愛着の関係を明らかにすることは, 大学の環境やサポート体制などを検討する大学マネジメントの観点から貴重な資料となる。

そこで, 本研究は, 島根県立大学の学生が所属大学への愛着や, 学生が関与を希望する大学教育活動とその背景を明らかにし, “学生 FD”を推進する方策について検討することを目的とした。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象

対象は, 島根県立大学に 2015 年秋学期に在籍している総合政策学部 882 名と看護学部 309 名,

計 1, 191 名の全学生である。

2. 調査方法

学生が集まる機会を利用して依頼書と無記名自記式質問紙を配布し, 口頭で説明した。また, 質問紙は提出箱に自主提出を求めた。

3. 調査内容

質問紙の内容は, 対象者の属性(性別, 学年, 所属学部, 住まいや通学時間, 入試方法や志望度, 大学への気持ちや教員と話す機会), これまで力を入れてきた大学生活(授業, サークルや部活動, 大学行事やイベント等の 14 項目), “学生 FD”として紹介されている教育活動(11 項目), 大学への愛着度として集団同一視尺度(唐沢, 2016)である。

4. 分析方法

分析は, 統計解析ソフトウェア IBM SPSS Statistics 22 を用いた。集団同一視尺度は, 7 件法の各カテゴリを 1~7 点とした合計得点で算出し, 最高は 49 点 - 最低は 7 点となり, 得点が高いほど愛着が強いことを示す(唐沢, 2016)。大学への愛着度として測定した集団同一視尺度得点を, t 検定, χ^2 検定, 一元配置分散分析を用いて, 属性や教員との交流や希望する大学教育活動で比較した。なお, 大学教育活動は[活動している・したい]と[どちらかといえば活動している・したい]を「活動したい」群, [どちらかといえば活動したくない]と[活動したくない]を「活動したくない」群として分析した。これまで力を入れてきた大学生活は[大学生活ではやっていない]と回答した者を除外し[とても力を入れた]と[まあ力を入れた]を「力を入れた」群, [あまり力を入れなかった][全く力を入れなかった]を「力を入れなかった」群で比較しファイ係数(ϕ)や特化係数を求めた。 ϕ とは, ピアソンの積率相関係数を 2 行×2 列のクロス表集計表に適応したものである。行要素と列要素の関連の強さを示す指標で, 値の大きさが関連の強さを表し, クロス表において対角線上にデータが集約されると係数が大きくなり, 関連性が強い傾向にある。また, 特化係

数とは、主に地域経済分析などで用いられる指標で、全体における構成比を各部分の構成比で割って求められるものである。この値が1から大きく乖離していれば、交互作用効果が現われていると解釈することができる。

Ⅲ. 倫理的配慮

対象者に、研究の目的や方法、匿名性、調査協力の有無に関係なく利益・不利益はないことについて文書と口頭で説明し、自由意思による協力を求めた。調査票は無記名で、自主提出をもって同意が得られたと判断した。なお、集団同一視尺度は開発者である唐沢穰氏の承諾を得て用いた。

なお本研究は、島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 155)。

Ⅳ. 結果

質問紙は、総合政策学部 689 名(回答率 78.1%)、看護学部 280 名(回答率 90.6%)、計 972 名から提出があり(回答率 81.6%)、全てを分析対象とした。

1. 大学への愛着度と学生が希望する教育活動の関係

学部・志望度・学年・性別に愛着度得点を表 1 に示した。愛着度得点は、総合政策学部 25.5 ± 7.3 は看護学部 27.1 ± 6.9 より 1.6 ポイント低かったが、有意差は認めなかった。また、推薦入試や第一志望で高く、また、学年が上がるほど高かったが、いずれにおいても有意な差は認めなかった。

学生が希望する大学教育活動の有無別に愛着度得点を表 2 に示した。学生が希望する教育活動で希望率が最も高かったのは「学びの環境改善」84.1%で、次いで「学生の改善案をもとに授業を改善」81.5%、「テーマを決めて学生同士が話し合う場」73.3%、「教職員と交流」73.2%、「学生の視点で良い授業を紹介」72.8%、「大学について学生と教職員と一緒に考える場」72.7%、

表 1 学部・志望度・学年・性別の愛着度得点

		mean ± SD		
		n	愛着度得点	
学部	総合政策	678	25.5 ± 7.3	n.s.
	看護	273	27.1 ± 6.9	
	一般	525	25.2 ± 7.3	
	A0・推薦	394	27.1 ± 6.9	
入試方法	編入学	7	28.1 ± 2.5	n.s.
	社会人	17	23.7 ± 6.4	
	その他	4	28.3 ± 2.1	
志望度	第一志望	539	27.3 ± 7.0	n.s.
	第二志望	113	26.3 ± 6.6	
	第三志望	295	23.5 ± 7.2	
学年	1年生	241	24.6 ± 6.7	n.s.
	2年生	269	25.0 ± 6.8	
	3年生	257	26.0 ± 7.3	
	4年生	183	29.3 ± 6.8	
性別	男性	455	25.1 ± 7.4	n.s.
	女性	492	26.8 ± 6.9	
計		951	26.0 ± 7.2	

t 検定, 一元配置分散分析

の順であった。学生が主体的に取り組む活動である「テーマを決めて学生同士が話し合う場」「教職員と交流」「学生の視点で良い授業を紹介」「大学について学生と教職員と一緒に考える場」「後輩への履修相談やゼミ紹介」「学生独自で授業アンケート」「学びの意欲を高めるよう教員にインタビュー」「大学の責任者と懇談の場」の 8 項目は、希望有が無しより有意 ($p < .01$) に愛着度得点が高かった。一方、希望率が 8 割以上と高かった「学びの環境改善」や「学生の改善案をもとに授業を改善」、希望率 6 割弱の「学生の発案をもとにした授業」の 3 項目は、希望の有無で有意差を認めなかった。

2. 学生 FD の認知と大学への愛着の関係

“学生 FD”を認知しているか否か別・対象の背景を表 3 に示した。“学生 FD”を認知している者は 299 名、認知していない者は 659 名で、有意な差を認めたのは性別 ($p < .05$)、学年 ($p < .01$)、大学教員と話す機会 ($p < .01$) であった。

表2 希望する教育活動の有無別・愛着度得点

希望する教育活動	希望率 %	有 mean±SD	無 mean±SD	有意差
学びの環境改善	84.1	27.5±6.9	26.3±6.2	<i>n. s.</i>
学生の改善案をもとに授業を改善	81.5	27.5±6.7	26.4±7.5	<i>n. s.</i>
テーマを決めて学生同士が話し合う場	73.3	28.2±6.3	24.3±7.4	**
教職員と交流	73.2	28.3±6.9	24.7±6.0	**
学生の視点で良い授業を紹介	72.8	28.2±6.6	25.1±7.0	**
大学について学生と教職員と一緒に考える場	72.7	28.1±6.4	25.0±6.5	**
後輩への履修相談やゼミ紹介	69.9	28.3±6.6	25.1±6.8	**
学生の発案をもとにした授業	58.0	28.3±6.7	26.0±6.8	<i>n. s.</i>
学生独自で授業アンケート	55.8	28.7±6.5	25.9±6.8	**
学びの意欲を高めるよう教員にインタビュー	54.5	28.7±6.7	25.5±6.8	**
大学の責任者と懇談の場	52.5	28.6±7.1	25.9±6.2	**

t 検定 ** : $p < .01$

“学生FD”を認知している者は、男性や3年生に多く、また、大学教員と話す機会がよくある・まあまああると回答していた。

“学生FD”を認知しているか否か別・集団同一視尺度の各項目の得点を表4に示した。7項目の合計の愛着度得点は、“学生FD”を「認知している」群 27.0 ± 7.2 は「認知していない」群 25.6 ± 7.2 より、有意 ($p < .01$) に高かった。各項目別に比較すると、「③あなたにとって本当に大切な友人は、A 公立大学の外、A 公立大学の内の、どちらに多くいますか」では、“学生FD”を認知している学生は大学内に有意 ($p < .01$) に多かった。また、「⑥あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分がA 公立大学に所属していることに、よくふれる方ですか」や「⑦あなたはA 公立大学にどれくらい愛着を感じていますか」で、そう思う者が有意 ($p < .05$) に“学生FD”を認知していた。

3. 大学生生活において力を入れてきた活動と希望する教育活動との関係

これまでに力を入れてきた学生生活を「力を入れた」群と「力を入れなかった」群、学生が希望する教育活動を「活動したい」群と「活動し

たくない」群でクロス集計した。その結果、有意確率 (p) が 0.1 未満、かつファイ係数 (ϕ) が 0.17 以上で比較的關係があると解釈できた組み合わせは7つで、各組み合わせについて特化係数を求め表5に示した。ファイ係数の値が最も高かった、[大学行事やイベントと後輩への履修相談] についてクロス集計した度数と構成比を表6に示した。次にファイ係数の値が高かったのは[大学行事やイベントと教職員との交流]、[サークル・部活動と後輩への履修相談]、[大学行事やイベントと学生同士自由に話し合う]、[大学の授業と学生改善案による授業改善] [大学行事と学生視点の良い授業紹介] [大学の授業と教職員との交流] の順であった。

活動したくないの特化係数が相対的に他の特化係数よりも1からの乖離が大きく、次の特徴がある。大学の授業と授業改善については、大学の授業に力を入れていない学生は、授業改善をしたくないと思っている(特化係数 1.626)。一方、大学の授業に力を入れた学生は、授業改善をしたくないとは思っていない(特化係数 0.768)。大学の授業と教職員との交流については、大学の授業に力を入れていない学生は、教職員との交流をしたくないと思っている(特

所属大学への愛着と“学生FD”の関係

表3 対象の背景と学生FDの認知

	学生FDを	認知している (n=299)	認知していない (n=659)	有意差
性別	男性	159名 (53.2%)	305名 (46.3%)	*
	女性	140名 (46.8%)	354名 (53.7%)	
学年	1年生	60名 (20.1%)	178名 (27.0%)	**
	2年生	63名 (21.1%)	206名 (31.2%)	
	3年生	92名 (30.8%)	170名 (25.8%)	
	4年生	84名 (28.1%)	105名 (15.9%)	
所属	総合政策学部	209名 (69.9%)	471名 (71.5%)	n. s.
	看護学部	90名 (30.1%)	188名 (28.5%)	
住まい	自宅	45名 (15.1%)	69名 (10.5%)	n. s.
	一人暮らし	192名 (64.2%)	457名 (69.3%)	
	大学の寮	59名 (19.7%)	116名 (17.6%)	
	その他	3名 (1.0%)	17名 (2.5%)	
通学時間 (片道)	15分以内	228名 (76.3%)	520名 (78.9%)	n. s.
	30分以内	53名 (17.7%)	100名 (15.2%)	
	60分以内	11名 (3.7%)	24名 (3.6%)	
	120分以内	2名 (0.7%)	6名 (0.9%)	
	120分以上	5名 (1.7%)	8名 (1.2%)	
	未記入	0名 (0.0%)	1名 (0.2%)	
入試方法	一般入試	163名 (54.5%)	368名 (55.8%)	n. s.
	推薦入試	123名 (41.1%)	274名 (41.6%)	
	編入学	1名 (0.3%)	6名 (1.7%)	
	社会人入試	9名 (3.0%)	8名 (1.2%)	
	その他	2名 (0.7%)	2名 (0.3%)	
	未記入	1名 (0.3%)	1名 (0.2%)	
大学志願度	第一志望	174名 (58.2%)	368名 (55.8%)	n. s.
	第二志望	32名 (10.7%)	84名 (12.7%)	
	第三志望以下	92名 (30.8%)	206名 (31.3%)	
	未記入	1名 (0.3%)	1名 (0.2%)	
大学への気持ち	とても満足	51名 (17.1%)	86名 (13.1%)	n. s.
	まあ満足	196名 (65.6%)	417名 (63.3%)	
	あまり満足していない	41名 (13.7%)	123名 (18.7%)	
	全く満足していない	11名 (3.7%)	32名 (4.9%)	
	未記入	0名 (0.0%)	1名 (0.2%)	
大学教員と話す機会	よくある	32名 (10.7%)	58名 (8.8%)	**
	まあまあある	137名 (45.8%)	225名 (34.1%)	
	あまりない	106名 (35.5%)	302名 (45.8%)	
	全然ない	24名 (8.0%)	72名 (10.9%)	
	未記入	0名 (0.0%)	2名 (0.3%)	

χ^2 検定 * : $p < .05$, ** : $p < .01$

表4 集団同一視尺度の各項目別得点と“学生FD”の認知

項目	学生FDの認知	学生FDを 認知している	学生FDを 認知していない	有意差
①「あなたは典型的なA公立大学の人だね」と言われたら、適切にあなたのことを表現していると思いますか		3.6±1.2 (n=291)	3.6±1.3 (n=641)	n. s.
②「あなたは典型的なA公立大学の人だね」といわれたら、どんな感じがしますか		3.5±1.7 (n=288)	3.3±1.7 (n=645)	n. s.
③あなたにとって本当に大切な友人は、A公立大学の外、A公立大学の内の、どちらに多くいますか		4.2±1.7 (n=291)	3.8±1.7 (n=646)	**
④あなたの考えや行動に影響を与えた人が、A公立大学内にはどれくらいいますか		3.9±1.6 (n=288)	3.7±1.7 (n=646)	n. s.
⑤「自分はA公立大学の人間だなあ」と実感することはありますか		3.9±1.6 (n=291)	3.8±1.7 (n=648)	n. s.
⑥あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分がA公立大学に所属していることに、よくふれる方ですか		4.2±1.6 (n=291)	3.9±1.7 (n=647)	*
⑦あなたはA公立大学にどれくらい愛着を感じていますか		4.4±1.6 (n=291)	4.1±1.7 (n=647)	*
	合計	27.0±7.2 (n=288)	25.6±7.2 (n=638)	**

t 検定 * : $p < .05$, ** : $p < .01$

表5 力をいれてきた大学生活と希望する大学教育活動の特化係数

	活動した・したい	活動したくない	
大学の授業	学生改善案による授業改善		ϕ
力をいれなかった	0.857	1.626	0.182
力をいれた	1.053	0.768	
大学の授業	教職員との交流		ϕ
力をいれなかった	0.809	1.418	0.172
力をいれた	1.071	0.845	
サークル・部活動	後輩への履修相談		ϕ
力をいれなかった	0.831	1.507	0.207
力をいれた	1.085	0.747	
大学行事やイベント	学生同士自由に話し合う		ϕ
力をいれなかった	0.891	1.381	0.186
力をいれた	1.09	0.684	
大学行事	学生視点の良い授業紹介		ϕ
力をいれなかった	0.876	1.320	0.181
力をいれた	1.103	0.735	
大学行事やイベント	後輩への履修相談		ϕ
力をいれなかった	0.835	1.496	0.260
力をいれた	1.136	0.592	
大学行事やイベント	教職員との交流		ϕ
力をいれなかった	0.832	1.368	0.226
力をいれた	1.39	0.695	

表6 大学行事やイベントと後輩への履修相談の関係

	n (%)	
	活動したい	活動したくない
力を入れた	415 (85.2%)	72 (14.8%)
力を入れなかった	253 (62.6%)	151 (37.4%)
計	668 (75.0%)	223 (25.0%)

化係数 1.418)。一方、大学の授業に力を入れた学生は、教職員との交流をしたくないとは思っていない(特化係数 0.845)。サークル活動や部活動と後輩支援については、サークルや部活動に力を入れていない学生は、後輩への履修相談などをしたくないと思っている(特化係数 1.507)。一方、サークルや部活動に力を入れた学生は、後輩への履修相談などをしたくないとは思っていない(特化係数 0.747)。大学行事やイベントと学生同士が自由に話し合う場については、大学行事やイベントに力を入れていない学生は、学生同士で自由に話し合いたくないと思っている(特化係数 1.381)。一方、大学行事やイベントに力を入れた学生は、学生同士で自由に話し合いたくないとは思っていない(特化係数 0.684)。大学行事やイベントと良い授業を紹介については、大学行事やイベントに力を入れていない学生は、良い授業を紹介したくないと思っている(特化係数 1.320)。一方、大学行事やイベントに力を入れた学生は、良い授業を紹介したくないとは思っていない(特化係数 0.735)。大学行事やイベントと後輩支援については、大学行事やイベントに力を入れていない学生は、後輩への履修相談などをしたくないと思っている(特化係数 1.496)。一方、大学行事やイベントに力を入れた学生は、後輩への履修相談などをしたくないとは思っていない(特化係数 0.592)。大学行事やイベントと教職員との交流については、大学行事やイベントに力を入れていない学生は、教職員との交流をしたくないと思っている(特化係数 1.368)。一方、大学行事やイベントに力を入れた学生は、教職員との交流をしたくないとは思っていない(特化係数 0.695)。

V. 考 察

“学生FD”は日本独自の活動であるが、学生主体の大学を実現する取組の一つとして(木野, 2016)、大学の規模や専門性に関係なく広がっている(木野, 2015)。今回、調査した学生が希望する11の教育活動は、“学生FD”の活動として紹介されている教育活動(木野, 2015)で、「希望する」群は「希望しない」群より愛着度得点が高かった。中でも、学生自身が主体的に行う8の教育活動は、すべて有意差を認めた。このような学生のニーズを汲み取る機会を持つことは今後の大学経営にとって重要であることは言うまでもない。一方、愛着度得点は所属する学部による有意な差は認めなかったが、学年が上がるほど得点は高くなっており、大学生生活を通じて徐々に愛着が高まっていくと推察できる。加えて、第一志望や第二志望で入学している層に比べて、第三希望の層では愛着得点が低く、当初から目的意識を持って大学に入学することが、学生のその後のモチベーションに影響するということを改めて示したことになる(ベネッセ教育総合研究所, 2010)。

大学への愛着と“学生FD”の活動は密接に関係しており、場合によっては両者にシナジー効果がある可能性も否定できない。しかし、愛着があるから学生FD活動を希望するのか、学生FD活動を行っているから愛着が生まれたのかは明瞭ではない。大学が好きだからこそ、これまで教員の専管事項であった授業運営や大学のマネジメントに対して意見を述べ、自らもより良い大学作りに協力したいという思いが生まれると考えられる。実際のところ、大学のイベントや授業・ゼミに積極的に関わる学生は、教員や職員とコミュニケーションをとる機会が多

く、大学に対してポジティブな印象を持っていることが多い。逆に、当初は消極的であったとしても“学生FD”の活動に参加することで、大学の抱える問題や課題を発見し、それに対して意見を述べ、教員やマネジメントがそれを前向きに受け入れれば、学生の側からでも大学を変えられる可能性があるという思いが生まれ、それによって大学に対する愛着が生まれることも十分に考えられる。したがって、愛着と“学生FD”の活動の間の因果関係が明確ではないとしても、両者は密接に関わっており、場合によって、両者がお互いにシナジー効果を発揮し、双方向的に影響を与え続ける効果が期待できる。

以上のことから、大学に対する愛着と“学生FD”の活動の両面を政策的に進めていくことは、大学教育の改善につながる可能性があるという意味において、重要な取り組みである。とはいえ、大学に対する愛着を高める施策を検討することは容易なことではない。なぜなら、学生が大学に対して抱く愛着は極めて多岐に渡る要因によって形成されるからである。大学での授業やゼミ活動、サークルや部活動、学園祭などのイベント、さらには留学やボランティア活動といったものが、個々人のレベルではどこに重きを置くかで強弱はあるものの、通常1つのファクターで愛着の大半が決まるということは考えにくい。したがって、大学生活の様々なファクターが愛着に影響を与える以上、愛着を高めるための大学側の戦略としては、大学生活全般に目配りをして改善していくという、総花的で、なおかつ当然とも言えるような政策を進めていくしかない。加えて、友人関係やアルバイトなどの外部要因にも大きく左右されることを忘れてはならない。これらのファクターは、もはや大学として対応できるレベルの範囲外にある外部要因である。

従って、むしろ、“学生FD”の活動を起点にして、学生の力で大学を変えられるという考えを全学的に広めていく取り組みの方が重要であると考えられる。この場合、2つの波及ルートが考えられる。第1は、“学生FD”によって講義内容や授業環境が改善し、それを通じて大学に対する愛着が生まれるという「直接的なルー

ト」である。第2に、これまで教員やマネジメントの専管事項であった大学運営に対して、学生の意見も聞いてもらえるという民主的な制度の構築が学生の大学への愛着を強めるという「間接的なルート」である。これらの波及効果が複合的に影響し、一定程度の愛校心の向上に結び付けば、そのことがさらなる“学生FD”として活動の活発化に結び付く可能性は否定できない。

今回の分析では、大学生活において力を入れてきた活動と希望する教育活動との関係を明らかにしたが、その因果関係の解明までには至っていない。しかしながら、今回の結果から、大学の授業やサークル活動、行事・イベントなどに力をいれてこなかった学生は、授業の改善やよい授業の紹介、後輩支援や教職員との交流をしたいとは考えていない。また、大学生活における各種活動に消極的な学生は、大学教育をよりよくして行こうとする“学生FD”の活動にも消極的な反応を示していることが明らかとなった。

このことから、入学後の早い段階で、大学行事などへ積極的に参加してもらえるような各種取り組みを行うことで、大学内での縦・横のつながりが密になり、ピア・サポートなどの活動が活発化する、あるいは、学内での人間関係を密にする取り組みを行うことで、大学行事なども活発となり、充実した学生生活を送ってもらえることにつながるものと考えられる。

謝 辞

島根県立大学出雲キャンパスにおいて、“学生FD”の始動時から多大なるご指導・ご助言を賜りました木野茂先生(元・立命館大学教授)に誠意を表わすとともに厚く御礼申し上げます。

文 献

- 吾郷美奈恵, 藤田小矢香, 長島玲子, 他 (2015) : 公立看護大学における学生FD活動の展望, 島根県立大学紀要, 10, 11-15.
ベネッセ教育総合研究所 (2010) : 母校への愛

- 着につながるファクターを探る, 2017-7-2,
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/dai/between/2010/01/01toku_01.html
- 堀洋道監修, 唐沢穰 (2016) : 心理測定尺度集Ⅱ, 221-225, (株)サイエンス社, 東京.
- 木野茂 (2016) : 学生主体の教育改善活動「学生FD」, 立命館高等教育研究, 16, 197-213.
- 木野茂 (2015) : 学生, 大学教育を問う, (株)ナカニシヤ出版, 京都.
- 木野茂 (2012) : 大学を変える, 学生が変わる, (株)ナカニシヤ出版, 京都.
- 小玉一樹, 戸梶重紀彦 (2010) : 組織同一視の概念研究 - 組織同一視と組織コミットメントの統合 -, 広島大学マネジメント研究, 10, 51-66.
- 京都産業大学 (2014) : 学生FDサミット2014夏 - あなたがキツク未来 -, 2017-12-10, <http://www.kyoto-su.ac.jp/outline/approach/excellence/kyouiku/summit/>
- マーチン・トロウ, 天野郁夫他訳 (1976) : 高学歴社会の大学 - エリートからマスへ, 東京大学出版会, 東京.
- Megan K. France, Sara J. Finnelly, and peter Swerdzweski. (2010) : Students' Group and Member Attachment to Their University: A Construct Validity Study of the University Attachment Scale, Educational and psychological Measurement, 70, 440-458.
- 文部科学省:平成29年度学校基本調査(速報値)の公表について, 2017-12-10,
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/08/03/1388639_1.pdf
- 文部科学省 (2016) : 大学設置基準等の一部を改正する省令の公布について (通知) / 27 文科高第 1186 号, 2017-12-10,
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1369942.htm
- 文部科学省 (2007) : 大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について (通知) / 19 文科高第 281 号, 2017-12-10,
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07091103.htm
- 文部科学省 (2000) : 大学における学生生活の充実方策について (報告) - 学生の立場に立った大学づくりを目指して -, 2017-12-10,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm
- 山上浩二郎 (2013) : 検証 大学改革 - 混迷の先を診る, 岩波書店, 東京.

Relationship Between Students' Faculty Development (FD) and Students' Attachment to the University

Minae AGO, Sayaka FUJITA, Reiko NAGASHIMA, Takeshi
SATO, Yoshitaka MATSUDA and Shuushi KIMURA

Key Words and Phrases : group identification, attachment, Student FD,
University